

日本における家族経営の特徴および その歴史的変動過程に関する地理学的研究

A geographical Study about a characteristic of
the state of family-owned Businesses and
the historic change process in Japan

湯澤 規子

YUZAWA Noriko

伝統社会における家族を近代化過程における「制約」として捉えることは、既往の研究が提示した一つの結論であった。しかしながら申請者は、家族がもつ特質が「制約」というよりもむしろ、社会や産業の近代化を根底で支えてきた側面もあると考えており、家族を通時的に検討したうえ、時代や地域におけるその相対的意味や特徴の差異を再検討する必要があると考えている。このような問題意識にもとづいて本研究では、歴史的、社会・経済的、地理的差異を視野に入れ、日本における家族経営の特徴とその歴史的変遷過程を地理学的に解明することを目的とした。その際、特に重視するのは①高度経済成長期、②複合的な生業構造によって成立する暮らしという二つの視点である。その理由は以下の通りである。

高度経済成長期を経てサラリーマン世帯が急増する以前の日本社会においては、職住が一致し、その暮らしが家族労働力によって支えられている場合が多かった。例えば農家、漁家、小規模な商家や工場などがこれに該当し、そこでは家族構成員が総出で働く姿が一般的であった。また、一言で農家といっても、その内実には土地に依存した農業生産に加えて商業、加工業、諸稼ぎを含めた多様で複合的な経営が見いだされる。各地域に展開した家族経営に内包される様々な就業が後に、資本主義を本質とした近代化とは異なる側面から日本の経済発展を支えたという考え方は、近年、在来的経済発展という枠組みの中で議論され始めている。日本における家族制度や家族形態、暮らしの論理は、不可避免的に日本の在来工業の構造的な特徴にもつながっていると考えることができる。したがって、微視的な視点から具体的な個人や家族、地域社会を分析することは単なる詳細な事実の提示にとどまらず、日本の地域社会における家族のあり方や役割、その時代的特徴を問い直す作業にもつながると申請者は考えている。

2006年度における調査地域としては、これまで調査

を進めてきた結城紬生産地域との比較研究となりうる事例として①漁家や商家など織物業とは生業基盤が異なる事例、②織物業が展開する他地域という二つのパターンを設定した。具体的には①の事例として宮城県仙台市および千葉県柏市において商店街地図収集や聞き取り調査にもとづく商店街調査を実施した。また千葉県銚子市における漁家調査を継続し、このケーススタディを意味づけるための女性労働や家族経営についてのレビューを作成しつつある。

②の事例としては埼玉県秩父地方の織物業に関する文献資料を収集するとともに、山梨県郡内地方における郡内織物に関する文献収集、現地調査を実施した。特に郡内織物に関しては、山梨県富士工業技術センターの協力を得て通時的な生産関係資料を入手するとともに、富士・東部農務事務所における聞き取り調査などによって農業経営と機業経営の関係や時代的推移を明らかにすることができた。この成果は『日本の地誌』（朝倉書店：近日刊行予定）の一部（首都圏Ⅱ 山梨県2 地域誌 郡内）としてまとめた。

また、これまで調査を継続してきた結城紬生産地域に関しても、高度経済成長期および複合生業論と暮らしの論理という視点から再検討を加え、「フィールドスタディにおける今後の課題－高度経済成長期についての一試論－」（人文科学論集52・53号、91-105頁、2007）、「明治・大正期における結城紬生産地域の景観と暮らし」（明治大学教養論集415号、37-56頁、2007）としてまとめた。

本研究では人間不在の学問と批評される地理学の新たな展開を意図し、個人や家族のライフヒストリーを収集検討することを主たる方法とし、地理学の基礎データとしての統計利用や地図類の他に、口述史およびそれを裏付けるための日記、作文、写真、作業記録などの多様な史料を発掘収集することに努めている。この方法については『地域調査ことはじめ』（ナカニシヤ出版、2007）の一部「ライフヒストリーによる地域調査〈語り＋α〉から暮らしを分析する」（126-136頁）としてまとめた。